

本研究は、幼稚園の一斉活動場面で偶発的に生じた、保育者の意図を超えた一時的な子どもたちの主体的実践活動およびそれによって生じる「隙間」に着目し、そこで生じている事象の意味を見出すとともに、新人保育者はどのように関わるのかを検討することを主題とした。

幼稚園は子どもたちの生活の場所であり、そこで子どもたちは学級集団や園に在籍する子ども集団といった規定の集団で過ごすことがある。この集団に対して行われる保育者による一斉保育は、一律に子どもたちの活動水準を高めることや効率よく集団生活の仕方を習得させるといった有用な能力を育む効果をもつ保育形態の一つであることが見出されている。また、保育者の期待が前景化するという特徴があり、大人の示す過ごし方を子どもたちが身体化していくプロセスが明らかにされている。さらに、規定の集団で過ごす場面は、新人保育者にとっても他のクラスのみとまりや他の保育者の指導との比較を通して困難感を抱きやすいことも明らかにされている。このように従来、集団で過ごす場面は、「社会化」や「集団への適応」といった、集団として同質化していくプロセスに焦点が当てられ、そのための指導力が求められてきた。それに対して、子どもたちは集団生活に従順に適応していくばかりではなく、集団の一員でありつつも外れる姿も見出されている（鈴木・岩立，2010；保木井，2017）が、このような事象はこれまで十分に検討されてきていない。そこで本研究は、集団の一員としての取り組みから外れる子どもの姿を「逸脱」として捉える見方を乗り越えるために、Wenger（1990）による「実践共同体」の視座を分析枠組みとして一斉活動が展開されている場を重層的に捉えた。そして、一斉活動場面を保育者の意図を超えた子どもの実践活動が創出される場として捉える新たな視点を導くために、生産性向上のために埋める必要性があるものとしてではなく、生の観点から可能性があるものとして、人の管理や想定を超えたところで生じる「隙間」の創出に着眼した。

以上を分析枠組みとして、本研究では、3年保育を行う東京都内 K 幼稚園におけるエスノグラフィーを通して収集したデータを分析し、従来「逸脱」と捉えられてきた子どもの姿を、保育者の意図を超えた一時的な「隙間」の実践共同体の創出として捉えなおし、子どもたちによって「隙間」の実践活動が創出されるプロセスを明らかにした。

まず、Wenger（1990）の視座に基づくと、一斉活動場面では、保育者の意図に沿って実践する「公式」の実践共同体と、保育者の意図とは必ずしも一致しない「隙間」の実践共同体が創出されていた。前者の「公式の」実践共同体では、子どもは保育者の示す内容に保育者が示す方法で一様にアクセスしており、対象との関わりやそこで生じる気づきも限定的なものであった。一方、「隙間」の実践共同体は、アクセスの制限を超えていくことで生じており、保育者の提示した内容とは異なる点に興味や関心を持ったり、保育者の提示した仕方とは異なったアクセスの仕方保育者が提示する対象と関わったりしていた。ここでは、他者や事物への関わりにおいて、公式の実践では出会うことのできなかった気づきが生じていた。つまり、一斉活動場面の「隙間」は、保育者が提示することで制限されたアクセスの範囲が、子どもたちの主体的実践の創出によって一時的に解かれていることに特徴があることが見出された。

次に、一見無意味なことをしているように見える子どもの「隙間」の実践活動に、新人保育者はどのように関わるのかについて、レイヴ・ウェンガー（1993）による実践共同体への「参加」の概念を枠組みと

して描出した。観察開始当初、保育者は「隙間」の実践活動を制止する言葉がけをもって「無関係性」あるいは「非関与性」を明白に子どもたちに提示していたが、しだいに、「隙間」の実践活動における子どもにとっての楽しさを感じ、子どもによって創出された独自の実践活動として肯定的に捉え、積極的な見方をするように変容していった。この変容は、保育者と観察者による事象の共有を通して、観察者の異なる視点に保育者が触れる機会が生じることが一つの契機となっていたと考えられた。「隙間」の実践活動を面白い視点に加わったことによって、大人の意図通りに子どもが活動に取り組む姿だけではなく、子どもがどのように他者や事物と関わっているのかについて、子どもの視点に立ってその生命力を感じ理解しようとするといった、子ども理解の深化が生じていたと考えられた。

最後に、「隙間」の実践活動を体験することの子どもにとっての意味について、矢野（2014）の「生命性」の理論に立脚して考察した。集団の同質性および社会化に価値がおかれる場合や将来の役に立つ能力をつけさせる有用性に価値がおかれる場合には、「隙間」で生じている事象の意味を掘り取ることが困難になる。しかし、「生命性」の理論に基づくと、「隙間」の実践活動に関わる子どもたちには、保育者の提示による限定した事物への関わりの制限を超えて、事物そのものへ没入し一体化するなかで、自己と世界との境界線が溶解する「生成」の体験が生じていたことが見出された。このことから、「隙間」の実践活動には「世界との連続性を取り戻す」意味が生じると考えられ、何かの役に立つことや何かができるようになることとは異なる次元で、子どもに今を生きている感覚をもたらすと考えられた。また、「隙間」の実践活動を尊重する意義として、子どもの存在そのものを受け入れること、一人ひとりの子どもの存在のありのままとその価値を認めることにつながる意義が考察された。

以上から本研究では、従来「逸脱」として否定的に捉えられてきた子どもの姿を「隙間」の実践活動の創出として捉えなおし、子どもが本来もつ生命的な姿を描出した。一斉活動の「隙間」の実践活動に関わる子どものありのままの姿を見出して受容することは、結果として、保育者の子ども理解がより深化することにつながる可能性を含むことが見出された。今後は、保育者の「隙間」の実践活動への参加の仕方の契機に関する関係論的視点からの検討を進めること、新人保育者が子どもの世界の面白さに入り込むことについての保育者育成の観点からの検討を行うこと、子どもの生命性を感じることによる「子ども理解」について探究することが課題である。